

『ブルー』

高橋
康太

【あらすじ】

母と妹と三人暮らしをする双葉家の長女、優子は、婚約したばかり。何一つ不満のない幸せの絶頂のはずが、元々の冷静な性格も相まってどうにも気分が上がらない毎日を過ごしていた。嫁入り当日、妹が恋人を連れてきてラブラブっぷりを見せつけられた優子はさらに憂鬱になり……。

【特記事項】

結婚に対する情熱がなくマリッジブルーに陥っている主人公の優子が、妹に背中を押され嫁に行く物語。

【文字数】

4 2 8 1 文字

【本編】

○双葉家・玄関・昼

玄関に座り込んで怖い顔の優子（28）。
まっすぐドアを見つめている。

×

×

×

○住宅街・歩道・昼

下校中の美香（17）と亮喜（17）。楽し
そうに腕を組んで歩いている。

×

×

×

○双葉家・玄関・昼

小さくため息をついて頬杖を突く優子。
靴棚上の家族写真を眺める。

×

×

×

○双葉家・門の前・昼

美香の家の前に到着。二人、繋いだ手
を振って名残惜しそうに、

美香「送ってくれてありがとう」

亮喜「家の中まで送るよ」

微笑みあいながら玄関を開ける。

美香・亮喜「うわっ」

玄関に座っている優子に驚く二人。眉一つ動かさない優子。

美香「何やってんのお姉ちゃん！　びっくり

したんだけど」

亮喜「優子ちゃんじゃん、まじビビったあ」

優子「そんなに驚いたのにぜえったいに手は

離さないんだね」

美香・亮喜「あ、えへへ」

繋いだ手を掲げて見つめあう二人。た

め息をつきながら立ち上がる優子。

亮喜「てか」

亮喜、優子と美香を交互に見ながら、

亮喜「なんでこんな所に座ってたんすか？」

無言の優子。美香、玄関に置かれてい

る大量の荷物を見てハッとす。

美香「あ！　そうだった……」

亮喜「ああ、旅行？　どこに行く――」

優子「嫁」

と、食い気味に言う優子。

優子「嫁に行くの」

亮喜、ぽかんとして、

亮喜「ヨメ……？」

○双葉家・外観・晴天

タイトル『ブルー』

○双葉家・風呂場

風呂掃除をする優子。真剣な顔。排水溝に泡が流れていく様子を見つめる。

○双葉家・リビング

美香と亮喜、スマホを触りながら談笑中。明美（51）、お茶と菓子を二人の前に差し出しながら、

明美「ちよつと美香も少しは動きなさいよ」と椅子に座って会話に混ざる。美香、だらしなく伸びながら、

美香「だって暑いもーん」

わざとらしくため息をついて、

美香「体べつとべつと。早くシャワー浴びたい

んだけど」

明美「今お姉ちゃん掃除中」

美香「はあ、何も今やらなくていいのにね」

三人、リビングの扉付近を見つめる。

美香「あれはね、ウチへの当てつけだよ」

美香、スマホをテーブルに置く。

美香「ウチが一番シャワー浴びたいタイミン

グで掃除始めたでしょ。わざとだよ。掃除

くらいもっと早くできたはずじゃん。私掃

除してますアピールしてないで、さっさと

大好きな旦那さんのとこ行けばいいじゃん」

明美「美香はお風呂呂入るのは好きだけどお風

呂洗うのは嫌いだもんねえ」

美香「姉妹で担当分けてるだけだもんね。掃

除担当と入浴担当」

明美「そんな都合のいい役割分担ある？」

と、亮喜に笑いかける明美。

亮喜「でもマジいいお姉ちゃんだね、美香。

いなくなったら寂しくなるんじゃない？」

美香「まあ、私の負担が増えるからね」

亮喜「なんか冷めてんなあ。優子ちゃんも優子ちゃんです。新婚さんって雰囲気じゃないし」

明美「元からライオンみたいにピリピリしてる子だからねえ。でもね、結婚決まってるから、神経質になっちゃって、腹をすかせたライオンにレベルアップしたのよ」

亮喜「マリッジブルーってやつだ！」

美香「……」

美香、スマホ見ながらお菓子を食べる。

そこに掃除を終えた優子が登場。テーブルの飲み物を一瞥して、

優子「私もなんか飲もうかな。てか、氷ないじゃん」

自分のコップを用意した優子、冷蔵庫から氷をわしづかみにして亮喜のコップに入れてようとするも、

亮喜「あ、いいです。お腹冷やすと良くないんで。すぐ下痢しちゃう」

その言葉に優子以外笑う。

優子、空中で氷を握る手を止めて、

優子「そう」

自分のカップに氷を入れる。お茶が少し飛び散る。口に一口含む。

美香「お姉ちゃん、ウチの氷は？」

美香、自分の空いたグラスを振る。

優子「自分でやんなさいよ」

美香「亮ちゃんのはやろうとしたくせに」

優子「亮君はお客さん。あんたは家の人。自分のことは自分でやるの」

亮喜「まあ、でも俺ももうこの家の一員みたいなどこありますよね。グラスがどこにあるかだって知ってるもん」

優子「よく言うね。まだ付き合って三か月のくせに」

明美「あら、四か月よ」

亮喜「あ、さすがお母さん」

明美と亮喜目配せして相槌を打つ。

優子「そんな誤差よ」

優子つまんなそうな顔でグラスを飲み干す。美香が呟くように、

美香「……そんなこといったらお姉ちゃんの
ほうがもう双葉じゃないけどね」

一瞬冷たい空気が流れる。しかし、

亮喜「え。そっか、優子ちゃん苗字変わった
んだ。何になったんですか？」

と、呑気な亮喜。優子、深く息を吐く。

優子「双葉家のことは双葉家の人がやってく
ださい。川島はもう出しゃばりませーん」

美香「……」

亮喜「へえ、川島かあ。川島優子、良いねえ」

優子「苗字に良いも悪いもないよ」

立ち上がる優子。グラスを片付け、

優子「やることもやったしそろそろ嫁に行く
とするかなあ」

優子、隣の部屋の仏壇に手を合わせる。

そこには健一（故・37）の遺影。

明美「お姉ちゃん、最後の最後までありがと
ね。お父さんもきつと喜んでるからね」

拌み終えた優子、明美のもとへ行き、

優子「お世話になりました」

軽く頭を下げ、すぐに家を出る支度を始める。

スマホを置いて立ち上がった美香。

美香「お姉ちゃん」

呼びかけに優子が振り返る。

美香「亮ちゃんのこと駅まで送って行ってよ」

優子「……私には嫁に行くっていう大事な用があるんだけど」

美香「ついでじゃん。ちよつと寄り道するだけ。嫁ぎ先は逃げないよ」

○双葉家付近・道路

優子が運転する車が走り出す。優子、ミラー越しに家の前で手を振る明美を見る。

美香、小さく鼻から息を吐いて後部座席にもたれかかる。

亮喜「そういえばさ、美香はこれからどうやって駅まで通うの？　今まで優子ちゃんに送り迎えしてもらってたんでしょ」

美香「うーん、ママの運転怖いしな」

亮喜「どんな感じ？　ワイスピ？」

美香「ううん（首を振って）、あれはアクション

映画じゃないよ、ホラー映画」

笑いあう美香と亮喜。優子、見慣れた

窓の外の景色を見る。声と景色がだん

だん遠くなる。

×

×

×

〔回想〕双葉家付近・道路・車内（十五年前）

家族旅行に向かう双葉家。健一（36）

が運転。助手席に明美（36）。後部座席

に優子（13）とチャイルドシートに座

る美香（2）。皆、楽しそうに笑う。

×

×

×

〔回想〕双葉家付近・道路・車内（十四年前）

健一（故・37）の葬儀。式場に向かう双

葉家。明美（37）、運転。遺影を膝に乗

せた優子（14）とあまり理解していな

い様子の美香（3）が後部座席。明美

と優子、号泣。

× × ×

〔回想〕 双葉家付近・道路・車内（二年前）

優子（26）、運転。助手席にはおろした

ての制服姿の美香（15）。

美香「やっぱお姉ちゃんの運転は安定感ある

わー。ママと大違い」

優子「一緒にしないでよ。ほら、お姫様、駅

に到着しましたよ。高校生活頑張りな」

× × ×

○ 駅・駐車場

駅の入口でイチャイチャする美香と亮

喜。車の中から眺める優子。

× × ×

亮喜を見送った美香が戻ってくる。後

部座席のドアに一瞬手をかけるも、助

手席に座る。スマホいじる。

優子「……」

美香「……」

優子「毎回今生の別れかと思うわ、あんだ達」

美香「……若者の一晩はお姉ちゃんの今生と

同じですから。青春は一瞬のきらめき——」

優子、美香からスマホ取り上げる。

美香「あ、ちよつと」

優子、画面を確認して茶化すように、

優子「別れてすぐ連絡……ラブラブだねえ」

美香スマホ取り返す。棒読みで、

美香「……お姉ちゃんはラブラブじゃないの」

優子「さあねえ」

はぐらかす優子。美香、スマホをいじ

りながら、

美香「……啓介さん、イケメンだし良い会社

なんでしょ？　うちにもママにも優しいし」

優子「……」

美香「啓介さんのこと好きじゃないの？」

優子「……好きだよ」

美香「ならいいじゃん」

優子「ただ好きってことと結婚はまた別でし

よ。あんたにはわからないだろうけど」

美香「そりゃわかんないよ。結婚したことな

いもん。でも結婚したことないのはお姉ち

「やんも一緒でしょ」

口をつぐむ優子。呟くように、

優子「結婚って……なんなんだろ」

美香、スマホをタップする手を一瞬止める。

優子「情熱がねえ、ないのよ。啓介と居ると肩の力は抜けるしストレスもない。でも、全てを犠牲にしても一生この人になりたいとか、絶対他の人に取られたくないとか、ないんだよねえ。そんなんじゃ結婚していいのかなあってさ」

美香、今までいじっていたスマホを膝の上に伏せ、

美香「はーあ」

と、深いため息。伸びをし駅の方を遠い眼で眺める。

美香「そろそろかなあ」

優子「何がよ」

美香「亮ちゃんと別れるの」

優子「は!!」

と、思わず美香を見る優子。

優子「なんで？ さっきまであんなに……」

美香「なんで……？」

考え込む美香。

美香「チェーン店しか連れて行ってくれない
……から？」

優子「はあ？ 何それ」

あきれ顔の優子。

美香、シートに深く座りなおす。

美香「……ウチさ、亮ちゃんと付き合っ
てから初めて自分はイタリアンが好きだ
って気づいたんだよね……美術館行っ
てスマホ触る人がムリだっていうこと
も、いただきますを言わない男の人は
冷めることも、実は一人の時間が絶対
欲しいことも亮ちゃんと付き合っ
てから全部気づいた」

優子「……うん」

静まる車内。

優子「つまり……？」

美香「だからあ！」

美香、ひときわ大きな声と早口で、

美香「結婚してみなきや結婚のことなんてわかんないんじゃないってこと！ 最初から考えすぎても仕方ないでしょってこと！」

優子「……」

何も言わず美香を見つめる優子。

美香「な、何？」

優子「結婚を知るために結婚する……か」

優子、やっと相好を崩して、

優子「何言ってるの、子供が」

と、美香の唇をつまむ。

美香「むぐ、ぶう……」

美香、優子の手を振り払って、

美香「もうっ、ウチもう帰る」

と、車を下りる。

優子「何してるの、送っていくよ」

美香「いい。これからは駅から家まで歩かないやだし。自分のことは自分でする。じゃあバイバイ。お姉ちゃんも頑張ってるねー」

ドアを閉めて歩き出す美香。

優子「美香！」

優子、窓を開けて美香の背中に向かって叫ぶ。美香振り返る。

優子「お風呂掃除！ あんたに排水溝だけは残しといたから帰ったらやるんだよ！」

と、笑いながら叫ぶ。美香、苦虫を噛み潰したような顔で、

美香「はぁ？ 最悪……」

優子「何！？」

美香「サ・イ・ア・クって言ったの！」

優子「ありがとね！」

美香「……」

優子「嫁行ってくるわ！」

エンジンをかけて車をゆっくり出す優子。手を振る美香が遠ざかっていく。

×

×

×

○国道・車・夕方

啓介の家まで車を走らせる優子。

信号待ちの最中スマホの通知が鳴る。

美香から画像。排水溝の髪の毛を掃除

しているしかめっ面の美香の写真。

それを見て思わず微笑む優子。

信号が変わる。

発信。

ミラーに映る優子の目に涙。

夕日に車が溶けていく。

(了)